

八百屋魚屋三軒あればこと足りて老いのくらしのますますせまし

(R)

大石田まつり・・・

室町時代(西暦1520年)、井出楯主太田佐仲さむらひが守護神として開いた愛宕神社は、領内安全を祈願して例祭を八月二十四日(現在は十六日)に行っていたといえます。そして、江戸時代から明治初期、最上川舟運ふねうんで栄えた大石田。“人は街道、物は舟運”と言われ、舟運は「紅花」「青苧あおそ」などの特産品を生み、「ひな人形」や「仏像」、衣・食・住の文化を届け、人々の交流をもたらしてきました。人々の川への思いが川供養として大石田まつりの根底に流れているようです。また、三七〇年程前に最上川から見つかったと伝わる大石田観音像(四日町)の出現により、舟運の繁盛はんじょうは一層盛大になったといえます。

花火大会が始まったのは、舟運が歴史を閉じ、鉄道や陸路の運送が盛んになる昭和の初め、大橋(ゲルバー)式の鉄橋の完成を祝う昭和六年『第一次煙火大会』からです。八〇年以上も前から続く大会ですが、横山側の河川敷で打ち上げられる花火は迫力満点。花火の破裂音が大高根山や黒滝山に反響し、少し遅れて届きます。二尺玉十連発の町民号には、観客全員でカウントダウンします。川面をゆれながら流れる灯籠、威勢のいい若者の御神輿おみこしに、祭りの夜は熱気に包まれます。

・・・

涼風至る(りょうふういたる)

8月7日～11日頃

暦の上では立秋、まだまだ暑さが残っています。大石田には、この時期の暑さを乗り切る食べ物があります。横山が発祥と言われている「ぺそら漬け」です。

色抜きした茄子に塩、辛みなんばを入れて漬け込んだぺそら漬けが絶品です。今ではどこの家庭でも食卓に出る夏の定番の漬物です。(き)

寒蝉鳴く(ひぐらしなく)

8月12日～16日頃

維新祭、花火大会と大石田の夏は最高潮。若者達はエネルギーを爆発させ、町中に活気を与え続けている。浴衣姿の高校生達、郡山市から参加してくれた阿波踊りの人達が暗闇の中に浮かんでいる。朝夕、ふと耳を傾けると、遠くの林から蛸の声が聞こえてくる。どこかもの哀しい。もう夏は終わったのだろうか。(木霊)

蒙霧升降つ(のうむしょうこう)

8月17日～21日頃

暑い盛りは、水かけご飯が夏の真ん中にあつた。釜に残ったご飯をふごに入れて洗う母の姿には、一粒たりとも無駄にしない始末の心があつた。上に載せると色のつく茄子漬の水かけご飯をするすると体の中に入れるすがすがしさ。真夏に涼を求める知恵。豊かな現代になった今、かえって贅沢な食べ物のように。(と)



本町の朝市 8月13日午前5時すぎ

読書会だより①

大石田の立秋のころ

七十二候より

大石田町立図書館

子どもの頃は、八月七日・八日に七夕を行っていませんでしたか。庭に細い竹を飾ってもらい、収穫物を供えて、友だちと笹飾りを作った覚えがあります。次の日は、みんなで「♪さきのはさらさら」と、歌いながら最上川まで流しに行きました。お盆前の子ども達の行事でした。